

梅雨期の大雨・日照不足に対する農作物被害防止対策

令和5(2023)年6月16日
下都賀農業振興事務所

気象庁の発表によると、関東甲信地方の今年の梅雨入りは、6月8日頃で平年より1日、前年より2日遅いとみられています。

梅雨期は、前線の停滞や大気の状態が不安定になるなど、大雨や日照不足の影響が懸念されることから、以下の技術対策を確実に実施し、被害の未然防止を図りましょう。

I 普通作物

1 水稲

- (1) 大雨により冠水したほ場は、速やかに排水に努める。
- (2) 長雨や日照不足に伴い、葉いもちが発生しやすいため、ほ場をよく観察し、発生が認められた場合は、治療と予防効果のある殺菌剤を散布する。
特に、葉色が濃いほ場や水温の低い用水を利用している場合は、いもち病の発生が懸念されるので粒剤等で予防的に防除する。
- (3) 農業環境指導センターHPで公表しているBLASTAMにより感染好適日を把握し、適切な防除に努める (jppn.ne.jp/tochigi/file/yosatu/Blastam/2023.htm)。

2 麦類

- (1) 倒伏や穂発芽等により著しく品質低下が懸念される場合は、刈り分けを行い、被害粒や未熟粒の混入防止に努める。

II 野菜

1 全般

- (1) 大雨によるほ場の冠水及び浸水が懸念されるので、排水対策に努める。
- (2) 大雨により病気が発生しやすくなるので、状況に応じて殺菌剤を散布する。
- (3) 曇雨天時の葉かきや芽かき等は、病気の発生が懸念されるため、作業は晴天時の午前中に行い、夕方には傷口が乾くようにする。
- (4) 曇雨天日が長く続くと茎葉が徒長しやすく、生理的落果や病害多発の原因となりやすいため、古葉は早めに取り、風通しと日当たりを良くする。
- (5) 日照不足の影響を緩和するため、きゅうり・なす・トマト等は小果(S~Mクラス)で収穫し、株の着果負担を軽くする。

2 施設野菜全般

- (1) 日照不足により生育は軟弱徒長になりやすいため、ハウス屋根被覆の汚れを落とすなどして採光を高める。また、曇天時は遮光資材を解放して、できる限り光線を当てるようにする。ただし、曇雨天後の強日射は軟弱に生長した植物体に高温障害、蒸散過多による萎れ等を引き起こすことがあるので、遮光資材による遮光等、強日射・高温への対策を併せて準備しておく。
- (2) 日照不足は、灰色かび病等の病害が発生しやすくなるため、状況に応じて殺菌剤を散布するとともに、十分な換気や循環扇の活用により施設内の通気を行い、湿度を下

げる。

3 いちご（育苗ほ場）

- (1) 苗の活着後は、定期的な葉かきやポット等の間隔を広げるなど、できる限り日光に当て、株の充実を図る。ただし、曇雨天後の強日射は、高温障害や蒸散過多による萎れ等を引きおこすことがあるので、遮光資材の活用等、強日射・高温への対策を併せて準備する。
- (2) 炭疽病、うどんこ病、疫病の発生を未然に防止するため、殺菌剤の予防散布を徹底する。

4 夏秋なす

- (1) 花や果実に光が当たるよう整枝や葉かきを行い、果実品質の向上を図る。
- (2) 大雨により菌核病や灰色かび病の発生が懸念されるため、状況に応じて殺菌剤を散布する。

5 にら

- (1) 新植ほ場では、植付け溝への滞水を防止するため排水溝を整備するなど、排水対策を徹底する。
- (2) 大雨によりさび病や白斑葉枯病の発生が懸念されるため、状況に応じて殺菌剤を散布する。

6 雨よけトマト

- (1) 草勢維持のため、不良果の摘果を行い、株の着果負担を軽くする。
- (2) 大雨により灰色かび病や疫病等の発生が懸念されるため、状況に応じて殺菌剤を散布する。

7 夏秋きゅうり

- (1) きゅうりは浅根性で、滞水すると根が酸素不足となり生育が抑制されるため、排水対策を徹底する。
- (2) 花への採光性や風通しを良くするため、側枝かきや葉かきを早期に実施する。
- (3) 大雨によりうどんこ病やべと病、灰色かび病等の発生が懸念されるため、状況に応じて殺菌剤を散布する。

8 ねぎ

- (1) 植付け溝への滞水を防止するため、排水溝を整備するなど、排水対策を徹底する。
- (2) 土入れや土寄せは、降雨後の加湿状態で行うと作業効率が劣るため行わない。
- (3) 大雨によりべと病や黒斑病、さび病等の発生が懸念されるため、状況に応じて殺菌剤を散布する。

9 かぼちゃ

- (1) 大雨により冠水しやすいほ場は、排水溝を整備するなど、排水対策を徹底する。
- (2) 大雨によりべと病や疫病等の発生が懸念されるため、状況に応じて殺菌剤を散布する。

Ⅲ 果 樹

1 全般

- (1) 大雨に伴い病害の発生が懸念されるため、降雨前の防除を徹底する。
- (2) 大雨によるほ場の冠水及び浸水が懸念されるので、排水路（明きょ）を設置するなど排水対策を行う。
- (3) 傾斜地は、土壌の流亡を避けるため、草生栽培とし、当面の間は耕うんしない。

2 なし

- (1) 日照不足の場合、果実肥大が緩慢となりやすいため、着果過多に注意し、仕上げ摘果により適正着果数とする。
- (2) 日照不足により黄変落葉が発生しやすくなるため、混み合っている部分の新梢は数本間引くとともに、新梢の誘引により受光体勢を整える。
- (3) 大雨により黒星病や炭疽病の発生が懸念されるため、状況に応じて殺菌剤を散布する。曇雨天が続いた場合、散布した薬剤の乾きが悪くなり、幼果に汚れが生じることがあるので注意する。

3 ぶどう

- (1) 日照不足により黄変落葉が発生しやすくなるため、新梢の摘心をこまめに行うなど、受光体勢を整える。
- (2) ハウス栽培は、梅雨の晴れ間の高温により、果粒の日焼けや軟化が生じやすいため、ハウス内が高温にならないよう換気をこまめに行うとともに、適宜かん水を行う。
- (3) 露地栽培は、果房の摘粒後速やかに袋かけを行い、病害の発生を予防する。また、大雨によりべと病や晩腐病の発生が懸念されるので、状況に応じて殺菌剤を散布する。

4 りんご

- (1) 日照不足の場合、果実肥大が緩慢となりやすいため、着果過多に注意し、仕上げ摘果により適正着果数とする。
- (2) 大雨により褐斑病や輪紋病等の発生が懸念されるので、状況に応じて殺菌剤を散布する。

IV 花き

1 全般

- (1) 大雨によるほ場の浸水及び冠水が懸念されるので、排水対策に努める。
- (2) 大雨により病気が発生しやすくなるので、必要に応じて防除を実施する。
- (3) 日照不足により、生育が軟弱徒長となりやすく、品質の低下や灰色かび病等の発生を助長するので、晴天時以外の遮光等は取り除き日照を確保するとともに、施設内の通気を良くして湿度を下げる。

2 きく

- (1) 露地栽培は、大雨により白さび病や褐斑病等の発生が懸念されるため、状況に応じて殺菌剤を散布する。
- (2) ハウス栽培は、白さび病が発生しやすいため、状況に応じて殺菌剤を散布する。また、換気を徹底するとともに、循環扇や暖房機の送風、かん水を控えるなど湿度の低下に努め、発生しにくい環境にする。

3 ばら

- (1) 大雨によりべと病の発生が懸念されるため、暖房機や除湿機により湿度を下げるとともに、状況に応じて殺菌剤を散布する。
- (2) 日照不足によりうどんこ病の発生が懸念されるため、窒素肥料の多用を避ける。また、枯れ葉の除去を行い、通風を良くするとともに、状況に応じて殺菌剤を散布する。

4 シクラメン

- (1) この時期の窒素過多は、葉腐細菌病等の発生を助長するので栄養診断などの結果に応じた適切な肥培管理を行う。

V 特用作物

1 ゆうがお

- (1) 大雨により冠水しやすいほ場は、排水溝を整備するなど排水対策を徹底する。
- (2) 炭疽病や褐斑細菌病が発生しやすいため、状況に応じて殺菌剤を散布する。

VI 畜産

1 畜舎

- (1) 雨水の流入が懸念される場合は、土のう等により対策を講じておく。
- (2) 車両や飼料、機器を水没しない場所へ移動しておく。
- (3) 大雨により浸水する可能性のある電気設備の防水対策を講じておく。
- (4) 堆肥舎への風雨の吹き込みにより堆肥や汚水が流出しないよう、堆肥をシートで覆うなどして流出を防止する。また、堆肥をほ場に一時置きせず、速やかに散布、耕起しほ場外への流出を防止する。
- (5) 風雨により畜舎が破損して外部から野生動物が侵入しないよう畜舎を点検する。
- (6) 雨上がり後の急激な舎内温度上昇や風雨の吹き込みによる飼養環境の悪化が懸念されるので、敷料交換や換気扇送風により畜舎内環境の維持に努める。

2 飼料作物（飼料とうもろこし、牧草）

- (1) 湿害が懸念されるほ場では、ほ場周囲に排水路を確保する。

VII 農地・農業水利施設について

- (1) 農地の冠水が予想される場合は、排水路の点検や補修を行う。
- (2) 農業水利施設の巡視、動作点検（堰のゲート開閉等）、事前操作を行う等、適切な施設管理を実施する。
- (3) 特に、ため池の被害防止のため、事前に洪水吐・堤体等の点検、洪水吐の閉塞の原因となる流木、浮遊物の除去等を行うとともに貯留水の放流による水位低下に努める。
- (4) 災害発生後、最新の気象情報を収集し、土砂災害、河川の増水や氾濫に注意するなど、身の安全を確認した上で農地や農業水利施設の巡視及び点検を行う。
- (5) 被害が確認された場合は、市町へ速やかに連絡する。

（注意）

- ※ 最新の気象情報を入手し、身の安全を確保した上で農作業を行うとともに、梅雨期の晴れ間の高温による熱中症などにも十分注意する。
- ※ 農薬の使用に当たっては、使用基準（適用作物、希釈倍数、使用時期、使用回数等）を厳守する。同一成分の使用回数にも制限があるので注意する。
- ※ 農薬散布に当たっては、天候が回復した後の急激な気温上昇により葉害等が生じるおそれがあることから、事前に登録内容をよく確認の上使用するとともに、散布時の飛散防止に十分注意する。

(参考)

○関東甲信地方1ヶ月予報(6月17日～7月16日) 各階級の確率%

	低い(少ない)	平年並み	高い(多い)
気温	10	30	60
降水量	40	30	30
日照時間	30	30	40

注) 気象庁: 令和5年6月15日発表